

書評と紹介

ナイラ・カビール著
遠藤環・青山和佳・韓載香訳

『選択する力』

——バングラデシュ人女性によるロンドンと
ダッカの労働市場における意思決定』

評者：平野 恵子

本書は、*The Power to Choose : Bangladeshi Women and Labour Market Decisions in London and Dhaka* (2000, Verso) の邦訳で、バングラデシュ人女性の有償労働におけるエンパワーメント、本書の視点によれば「選択」にかかる諸課題を、ロンドンとダッカの縫製産業に従事する女性労働の比較から明らかにしようとするものである。

著者のナイラ・カビールは、「2015年の『世界で最も影響力のあるジェンダー研究者』ならびに『国際機関や国際NGOに雇用される、最も影響力のあるジェンダー専門家』のいずれの項目でも第1位に選出」(本書「解説にかえて」p.401, 以下数字のみ記載)されており、ジェンダー研究、ジェンダーと開発や女性労働の分野において著名な研究者である。そのカビールの代表作ともなった本書は、ジェンダーと開発や、ジェンダーと労働、そして移住労働分野における古典とも呼べる。原書より16年の月日が経過しているとはいえ、本書の日本語訳が刊行されたことは、いまだ論点であり続ける女性の有償労働と選択との関係性を考察する上で大

きな手掛かりを提供するものであり、加えて巻末に著者本人の近年の講演録ならびに訳者による解説が所収されることにより、現代的な意義はさらに高まっているといえよう。

*

11章の本文と3つの付録からなる本書は、前半でダッカの、後半でロンドンの事例を実証的また理論的レベルで扱っており、2つの事例が比較可能なように対照的な構成となっている。なぜ、バングラデシュ人女性は文化的規範から自由であるかのように思われるロンドンで家内労働に従事し、文化的規範が強く行動の自由に制限があるかのように思われるダッカで、縫製工場での就労という選択をしたのか。こうした疑問から出発する本研究は、バングラデシュ人女性の労働市場への参入の機会に、一見「逆説」的ともとれる反応を示したロンドンとダッカでの女性労働者の語りを用いて、この「逆説」を形成する諸要因を、個人、世帯、そして社会へとその分析視点を拡大しながら、同時に変化や制約が作用する種々のプロセスを実に緻密に描き出している。

こうした女性労働の比較実証研究としての顔と同時に、本書は理論書としての特性も持ち合わせている。第2章で議論される理論的枠組みの1つは新古典派経済学による合理的選択理論である。人間の行動すべてを個人の選択と行為の帰結とし、合理的選択をする個人を人間と捉える議論においては、世帯での意思決定は、あらゆる資源が世帯主である「慈悲深い独裁者」(24)の権威の下に集められ、厚生最大化原則に則って資源は配分される。もう1つの理論的枠組みは、途上国女性を、構造に制約を受ける受動的な存在として表象してきた方法論的構造

主義である。本書は、これらを二元論的ではなくむしろ相互に依存的なものとして捉えようと試みており、ミクロ、メゾ、マクロの3つのレベル、すなわち女性労働者の行為主体性、世帯内の協調や対立、そして構造がロンドンとダッカの複雑な文脈に沿って丹念に分析されている。さらにこの相互作用の中に社会変化の契機を見出している。

*

それでは、以下、本書の構成を紹介していこう。

第1章「労働の基準、二重基準？——国際貿易における選択的連帯」では、縫製産業の国際的再編を、バングラデシュの国際移転とロンドンの国内移転の双方から議論する。また、国際分業におけるジェンダーと資本の理論群についても検討を重ねており、世界市場向け工場労働で若い未婚女性が労働者として選好される「器用な手先」言説とは、雇用主が女性労働力からの利益を最大化するための文化的実践であり、有償労働が必ずしも女性の従属的な地位改善に寄与するわけではないことを明らかにした。そこで見過ごされていたのは、女性労働者自身による開かれた交渉や再構築であり、社会的アクターとしての女性労働者であったことを指摘する。

第2章「『合理的な愚か者』と『文化的なまぬけ』？——社会科学における構造と行為主体性に関する諸説」では、新古典派経済学と構造理論の特徴をそれぞれ概観し、「中間的立場」(21)が有する可能性について検討している。厚生最大化原則が提示する利他的な世帯は、後の分析で実証されるように、「協調」のみならず「対立」の場でもあり、そこから流動的な世帯を読み解くための「協調的対立」という視点が提示される。一方、方法論的構造主義は、途上国女性を、構造に制約を受ける受動的な存在

としてあらわしてきたが、上述のように二元論的アプローチではなく構造と主体を相互依存的なものとして捉えることで、ロンドンとダッカで有償労働に従事するバングラデシュ人女性の語りを、彼女たちの生きられた経験の文脈に位置づけ、有償労働に対する文化的制約やその制約に対する彼女たち自身の理解、そしてそれらに変化をもたらそうとする彼女たちの意思や能力についても分析することが可能となる、と論じられる。また、この語り自体が、中間理論を検証する事例ともなり得、理論的貢献につながっていると主張する。

第3章から第5章は、ダッカの事例を扱っており、第3章「黄金のバングラの変わりゆく顔——ダッカ調査の背景」では調査地の文脈を提示する。繊維産業及び衣類産業における保護主義の歴史的背景をたどり、男性が主たる生計稼得者である地域で女性労働力が台頭した理由及び雇用主により選好される要因を明らかにしている。1980年代以降の、特に製造業への女性の労働力参加率の劇的な増加は、女性自身の意思決定であるとともに、雇用主側の選好も影響していた。加えて、従来の「世帯」概念を揺るがす「世帯構成員」の捉え方にも着目して、非常に流動的な「世帯」を提示した。

第4章「パルダの再交渉——ダッカにおける女性労働者の労働市場における意思決定」は、縫製産業労働市場に参入した女性の意思決定を彼女らの語りから論じている。ここでの意思決定とは、第一になぜ稼ぐのかという稼得に関する動機、第二に就労に関する決定、第三に有償労働のうちなぜ縫製産業への参入を選択したのか、の3点を指す。女性の行為主体性と世帯の意思決定において、就労に関する世帯内の交渉は、物質的利益のみによって規定されるわけではなく、女性の有償労働需要を縮小させるような社会的文化的規範との再交渉のプロセスでも

あること、またモラル・コミュニティとしてあらわされる共同体像は、女性が縫製産業に従事する都市部においては、意思決定の重大な要因として論じるに不適當であることが示される。女性の工場労働への参入は、家父長的契約の侵食と同時に、男性世帯主モデルを維持することができない男性が増えてきたことによっても理解されねばならない。そうすることで、女性は、家父長制のリスクを予見し縫製産業で就労する機会を認める行為主体として立ち現れる、と説く。

続く第5章「個人化されたエンタイトルメント——工場賃金と世帯内権力関係」は、主たる生計稼得者という、新たな地位が女性たちにどのような選択を可能にしたのか、またその意図せざる経路について論じている。従来の研究では、世帯内における所得分配の問題が焦点化されていたが、本章では、就労という有償労働の初期段階での意思決定の重要性が指摘される。家父長制に対して明白に対立を求める手法を女性たちは採用せず、私的な交渉を選び、また男性の権威を無傷のままとしたことから、一見家父長制は揺らいでいないかのようである。しかし、集合的な生活水準の上昇とともに、世帯内における女性たちの「価値」は上昇し、分配の優先順位の変化をもたらし、婚姻関係からの退出やその予防的措置の選択肢を増やすという可能性を拡げていた。

第6章から第8章は、ロンドンの事例を扱っており、「7つの海と13の河を超えて——ロンドン調査の背景」と題された第6章では、ロンドンの移民コミュニティにおける女性の就労の背景を提示する。

続く第7章「構造の再構成——ロンドンにおける家内労働者の労働市場における意思決定」は、ロンドンにおけるバングラデシュ人女性の有償労働への参入の意思決定を考察する。第4

章と同様に、女性の就業に関する意思決定、家内労働の決定、そして縫製工場での就労に関する決定の3点につき、女性自身の見解と世帯の他の構成員の選好から、構造と女性の行為主体性の相互作用を明らかにする。ダッカの事例と異なり、ここではコミュニティの存在が前景化される。ロンドンの文脈では、移動の形態が家族結成型で、定住者の親族とそのコミュニティを中心とするような選択的な移民コミュニティが形成されていた。これが示すのは、出身コミュニティにまで遡ることが可能な個人的ネットワークに紐づけられる、地理的に集中した対面式コミュニティである。そこに、人種差別的排除という要因が重なり、移民コミュニティの経済的社会的資源に依拠したバングラデシュ版のエスニック経済が作り上げられることとなる。主流の労働市場からのバングラデシュ人男性の排除と限定された労働市場部門への閉じ込めが、本章で検討したバングラデシュ人女性たちの縫製産業からの排除と家内労働部門への集中につながっていることを示している。

ロンドンの事例を扱う最終章「仲介されたエンタイトルメント——在宅の出来高賃金労働と世帯内権力関係」と題される第8章では、5章同様、女性の賃金が世帯に入ったところからその用途をたどり、分配、賃金の管理、統制、そして選択の問題について論じている。家内労働からの報酬は、不規則で低額であるという2つの傾向を有している。また、在宅で働くことにより、家族の他の構成員が介入したり統制したりする余地が非常に大きいこともその特徴として指摘される。既婚女性の場合、家内労働は家庭内義務を果たした上での残余活動として位置づけられていた。しかしながら、ここで注意を喚起したいのは、ロンドンのバングラデシュ人女性が置かれている社会的孤立の状態から、交渉が対立した場合の女性たちの婚姻関係からの

退出の選択肢が非常に少ないがゆえに、選好にかかわらず家内労働といった限定的な潜在的変換力しかもたらさない雇用に就いているという点である。女性たちの家内労働が世帯内関係に埋め込まれており、その世帯がより広いエスニック経済に埋め込まれているというロンドンの文脈が丁寧に描き出されている。

第9章「労働市場における排除と経済学——逆説の説明」は、前章までに確認したダッカとロンドンにおけるバングラデシュ人女性の縫製産業労働市場への包摂を、集合的次元で考察している。縫製産業は、そもそも、柔軟な労働力を要する「女性化」された産業であり、調査したロンドンとダッカの2つの文脈では、ともに労働市場における分断と、脆弱な集団の周縁化という特徴が見られた。その一方でロンドンの文脈では、労働市場のジェンダーによる分断に加えて、人種による分断でさらに階層化されている。後者の分断は、バングラデシュ人男性が不利な労働者として周縁化されており、その男性のために女性は出来高払いでの家内労働に従事するという「二重の閉じ込め」を意味する。これには政府の役割が大きく関係していることが示唆され、またコミュニティの同質性の強弱が与える影響も指摘される。市場、政府、コミュニティの特定の配置によって生まれる差異を明らかにしているのが本章である。

第10章「選択の力と『見えない事実の確認』——構造と行為主体性の再検討」では、ミクロ、メゾ、マクロレベルを架橋し構造と行為主体性の相互作用、さらにそこから生まれる社会的変化について論じている。工場労働への参入という、女性の大規模な労働市場への参入というダッカの構造的変容を示し、女性の新たな稼得能力の結果としての社会的変化をもたらす力が検討される。例えばそれは、子供や娘たちへのより良い生活や機会の提供、女性たち自らの

行為主体性を損なうような関係性からの離脱であり、そうした試みすべてが力の発動として捉えられる。最後に、これら個々の行為の意図的もしくは意図しない結果が構造的な次元での変化として統合されることで、漸進的ではあるものの社会的な変化をもたらしていることが示される。

最終章である第11章「弱い勝者、強い敗者——国際貿易における保護主義の政治学」は、国際貿易における倫理的基準を労働者、特に第三世界で働く女性たちの視点から論じている。児童労働が「国際的な公共悪」(342)として提示された結果、バングラデシュのような縫製産業におけるかれらの労働力の段階的廃止は、教育サービスの供給拡大や改善に対する投資を随伴したり、その家族に対して何らかの保障を包含したりするものでなければ、むしろ児童の福祉を脅かす結果となり得ることを示し、先進工業国世界の倫理基準の逆説的な影響を指摘している。また、労働基準をめぐる交渉における利害関係についても再考を迫る。従来の組合運動が目指す労働規範よりも就労の場での権利の拡大を重視する女性労働者にとっては、一般的に「搾取」や「奴隷」で表象されるような労働契約そのものがむしろ自由への道であり、こうした一見矛盾したジェンダー特有の含意を見落としてはならない、との指摘は示唆に富んでいる。

本文に続いて、研究手法、調査地の統計データ、著者自身による講演録と、訳者遠藤環による「解説にかえて」が収録されている。講演録では、研究の動機やその経緯が示され、女性の「エンパワーメント」を概念化するにあたり、先行研究で用いられていた「自律性」ではなく「選択」を採用した理論的背景が示される。また、「解説」では本書の構成と本書の理論的貢献が簡潔に記された後、原書刊行以降のダッカ

とロンドンの文脈を理解する上での追加情報が案内され、最後に本文中で展開された論点を深める上での文献案内をもって本書は閉じられる。

*


巻末の遠藤による解説は、難解と評される本書の理解を助ける水先案内としての役割を果たしているのみならず、刊行以降のバングラデシュにおける縫製産業の研究課題を提示し本書の現代的意義をさらに高めていると言えよう。

本書に課題があったとするならば、原書評にあるような女性のエンパワーメント、すなわち生産労働と再生産労働の二重の負担からの解放はいかにして可能か(408)、また就労の場の権

利拡大にあたり本書で示された女性たちの戦略は具体的にどのような展開を見せるのか、といった点であろう。しかし、それは本書のみから得られるものではなく、その後の縫製産業について解説が論じたように、カビールの視点を批判的に受け継ぎながら、われわれ自身を取り組むべき課題であるといえる。

(ナイラ・カビール著、遠藤環・青山和佳・韓載香訳『選択する力——バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』ハーベスト社、2016年4月、xvi+436頁、定価3,600円+税)

(ひらの・けいこ 北海道教育大学国際地域学科特任准教授)



有斐閣

出版案内

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17/Tel.03-3265-6811
<http://www.yuhakaku.co.jp/>
(表示価格は税別。消費税込みの金額が定価です。) ◎図書目録送呈◎

Anniversary
140th
学術雑誌創刊140年
 since 1877

合理的配慮 A5判 二七〇〇円

川島 聡・飯野由里子・西倉実季・星加良司著◎対話を開く対話が拓く障害者基本法、障害者差別解消法、障害者雇用促進法によって法制化された障害者に対する「合理的配慮」。法学・社会学・ジェンダー研究の視点で、「共生の技法」となりうるこの新しい概念を追究する。

はじめのジェンダー論 (有斐閣ストロベリー) 予価一八〇〇円

加藤秀一著 なぜ人は男か女かという性別にこだわるのか。ジェンダーの基礎から最新動向まで、軽妙な講義調で解き明かす、著者待望の書。

ジェンダーの政治経済学 A5判 三九〇〇円

原 伸子著◎福祉国家・市場・家族

原 伸子著「新家庭経済学」における女性労働の分析とその後のフェミニスト経済学の発展を丹念に追い、さらに社会的ケアの理論的分析、福祉国家におけるワーク・ライフ・バランスや家族政策等ジェンダー政策の精査を行う。

ボランテニアを生みだすもの A5判 三五〇〇円

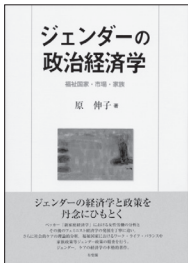
三谷はるよ著◎利他の計量社会学 どのような人が、なぜボランテニアになるのか? 「ボランテニアの担い手」を生みだすメカニズムについて、計量的なアプローチから明らかにしていく意欲作。

殻を突き破るキャリアデザイン 四六判 一七〇〇円

筒井美紀著◎就活・将来の思い込みを解いて自由に生きる

派遣労働という働き方 A5判 予価四三〇〇円

島貫智行著◎市場と組織の間隙 質的調査で当事者視点に迫る。



ジェンダーの政治経済学
編訳者：有斐、原伸
 原 伸子*

ジェンダーの経済学と政策を丹念にひもとく

56

大原社会問題研究所雑誌 No.702/2017.4